

國民道德史上より見たる聖德法王

春日 眞也

一
カント流に云つて、この問題は「それを考へるこゝに屢々にして且つ長ければ長きほど、常に新にして増し來る感歎と崇敬とを以て心を充すもの」一つである。

二
部分と全體との關係に於て、二つの場合が考へられる。

第一のそれは幾何學に於ける如く、部分の集合として全體を認むる機械的觀點に立つ見方であり、第二のそれは全體と部分との間に相即相入の關係を認める有機的全體としての見方である。

私はこの事を最も單純に承認する。

今、部分なるものが國民道德に相當し、全體なるものも一つ一つの一般的、普遍的、全世界的、全人類的といった様な道德に相應するものとすれば、この兩者の關係に於て第二の場合が契合する。

斯くて國民道德は「汝の意志の格率が常に同時に普遍立法の原理として妥當し得る様に行爲せよ」といふ様な倫理的原則に妥當し乍ら、その特殊な國民生活によつて特異性付けらるゝ内容を有しつゝその國民生活に割切する道德を意味する。

従つて、國民道德史上より見て、その國民生活を特異性附けて居る國史上の事件、社會狀態や思想界の變亂、動搖期

に際して一世を指導し、國體に關聯せる史實を遺して居る顯著なる人物の、國民道德史上に於ける地位は、非常に重要性を有するものと斷ずる事が出来る。

三

建國以來繼續して維持せられ來つた純乎而純なる國民思想の、やうやく亂れ初めんとする時しも、受動日本から能動日本へ、消極日本より積極日本に向はんことある過渡の危険期に際し、大日本建設の理想に燃えて、一世の指導者としての重き責任を擔つて、奮闘すべく出世遊ばされたものは、實に既戸豐聰耳聖德法王即ち聖德太子その人であつた。

四

大陸の文明が何時ともなく、流れ込んで來て居り、應神天皇の御世以後朝鮮を経て盛に輸入せられ來つた支那文明はやうやく我が國民思想を侵す様になつた。

支那思想の我が國傳來の媒介を爲し、之を指導したものは、歸化せる朝鮮人若しくはその子孫であつた。

斯くて、純なる國民思想によりて形成せられて居つた、純日本的とも云ふ可き、皇室を中心とし神聖なる天皇の下に直接に且つ平等に德澤に浴する部族制度の上にも、朝鮮の影響を受くるに至つた事は否めない。

事大主義の朝鮮人に依つて、指導せられ來つた我が日本の社會は、朝鮮化しつつ進み、支那に對しても殆んど事大思想によつて左右せられたのである。

かゝる思想によつて、閥族の跋扈となり、平等的であつた部族制度は、階級的部族制度に移り行き、皇位繼承に至るまで、大伴蘇我物部等の擅權を極めた大臣大連の左右するところとなつてしまつた。

事大思想の朝鮮人によつて指導せられた國民は、全く事大思想に陥つた爲に對外的に萎靡沈滯を來し、支那に對しても、屈從的態度を示して居る事が判る。

斯かる退嬰的な日本は、さうしても若き熱血燃ゆる青年の如き、進取的なる大日本に、更生し蘇生せねばならなかつた。

延喜式祝詞の註釋をして居る鈴木重胤が其の著に於て「此は天照大御神の天津瓊戸より押張して御照し坐る大御徳と皇御孫命に天下國の八十國島の八十島の有の悉事依し奉給ふ御天降段の故事を兼て當今の御事實を白させ給ふ者にて古文の神妙此に盡せり」と、絶讃の語を呈して居る祈年祭の祝詞の一節に、次の文がある。^{註(六)}

「皇神能見齋志坐。四方國者。天能壁立極國能退立限。青雲能靄極白雲能墜坐向伏限青海原者棹柁不干。舟艫能至留極。大海原爾舟滿都都氣氏自陸往道者荷緒縛堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪至留限。長道無間久立都々氣氏狹國者廣久峻國者平久遠國者。八十綱打掛氏引寄如事。皇大御神能寄奉波」云云

これ實に上代國民の國家的自覺であり、理想であり、國民精神である。

未だ外國と交通の開けない時代に於ける、國家としての理想、自他對立以前に於ける、自我の自覺の存在である。

これは、外國と交通が開かれ、外國に對する時、最も鮮明に現出して來るべき、性質のものであつた。

國家的な國民思想の過渡動亂の期に際して、決然と事を斷する偉大な指導者の心に、確信を與へ信念を喚び起したものは、實にこの國家的自覺であつた。

五

大悟徹底して、八風吹けぎも動ぜざる底の境界を、建立して居られる大偉人として見られ、又外來思想を日本化して國民の歸趣を示された大偉人として見られ、又古來傳へらるゝが如く、觀世音菩薩の化身として、立聖之徳を以て、日本國に生れませる聖者として見られ、又書紀第二十二卷に記すが如く、片岡山事件に於て一時の人大に異みて曰く、聖の聖を知ること、其れ實なる哉。逾惶まる」と傳説的な尊敬の對象化せられて居られる聖德太子は、又一方に於て、國

史上に於て、垂簾之政をみなはせられた最初の天皇であらせられる推古天皇の攝政として、その國民道德史上に於ける地位は、誠に大なるものがある。

六

その政治上に於ける攝政としての地位と、國民の思想上に於ける聖者としての地位とが與へる問題は興味あるものがある。

聖德太子に纏りめぐる非難の本源は二點に要約される。即ち一は東漢直磐井の子東漢直駒を使得て崇峻天皇弒逆の大罪を犯して居る馬子宿禰と俱に、政治を執つたといふ事であり、他は佛教信仰に傾倒して、佛教興隆に力を入れ過ぎた、といふ事である。

百濟の聖明王が欽明十三年冬十月、西部姫氏達率怒喇斯致契等をして佛像經論を獻ぜしめた時に、別に表しゐる文に「是の法は諸法の中に於て、最も殊勝れて爲す、解り難く入り難し。周公、孔子も尙知ること能はず。此の法は、能く量無く邊無き福徳果報を生して、乃至、無上菩提を成し辨ふ」といふ佛教の興隆に努められたのであるから、儒林より攻撃的を求めて矢を放たれるのは當然の事であつた。

實に、林道春一たび非難の聲を擧げてから、多くの漢學者、本居宣長の如き國學者、等、徳川時代の學者の殆んぎすべてが攻撃の筆を執つて居る。

七

八面玲瓏たる富嶽の如く、孰れより望み見ても晃耀たる聖德太子が、あれ程の地位と聰明と人望とを以て、崇佛政治を執られた事は、誠に喜ばしい事であつた。しかし聖德太子が、弒逆の大罪を犯せる逆臣馬子を誅して、天下に大義を示す事なくして、そのまゝ大臣の要職に据えて、俱に崇佛政治を執られた事は、誠に遺憾であつた。

八

偉人に對する評價が、時代に依つて推移するのは、敢て珍らしい現象ではない。我々の興味をそゝる、歴史上に於ける特異な事件に關係した偉大な人物に下された批判や辯護は、史實の上からは、價值に乏しいものであつても、思想上の事實であり、國民の心理を支配せるものである限り、國民道德史上、輕々しく看過さる可き性質のものではない。

九

私達が書紀の最も關係深き卷々を繙いて見る時、先づ國民の道德的意識を明確ならしめた十七條憲法の條文より、當時の狀勢を洞察して、太子の御精神の那邊にありしやを知り、太子の執られた態度を批判せねばならない。

三浦周行氏は、大正八年憲法發布三十年記念講演會に於て、十七條憲法に關して述べて居られる。

「憲法十七條は古代の法律であるにしても、其佛書や儒書の文句を取合せて「以_レ和爲_レ貴」ミが「篤敬三寶」ミか
いふ分り切つた倫理宗教の説を並べ立てたところを見るミ、一種の訓戒に過ぎぬミの感を起すのも無理ならぬミと思はれるが、それは此憲法の出來た時代から離れて條文のみを眺めたからの事である。若し其時代を通じて條文を見、又條文を通じて其時代を見たならば、何れも頗る時宜に適した規定であつて、表面平凡に見ゆるミでも、なか／＼激烈にして突飛なる改革を意味するものゝあるミが知れる。憲法十七條の生命は實に其點にあらうミ思ふ」ミ。

假りに、書紀の記述に従ふミすれば、十七條憲法は「推古天皇十二年夏四月丙寅朔戊辰皇太子親ら肇めて憲法十七條を作りたまふ」ミなつて居る。しかしこの制定年代は、上宮聖德法王帝説の記事に依るミすれば「少治田天皇御世乙丑年五月。聖德王與_ニ嶋大臣_一共謀建立佛法。更興三寶。即准五行。定_ニ爵位_一也。七月立_ニ十七條_一餘_ニ疑_一法_一也」ミあるから、乙丑年即ち十三年七月といふ事になる。

境野黃洋氏は「蓋し此の憲法十七條に定め給ひしこは、その内容が、從來の封建制度を止めて郡縣制度ミするこは

門閥制度を廢して、人才登用の政治をすることの二大眼目にあるのであつて、是れはやがて、封建の制度によりて勢力を維持し、閥族として重きをなして居る蘇我氏等に取りての、一大痛撃でなければならぬのである。憲法十七條で、最も重大の意義のあるものは、先づ第一が封建打破を宣言し給へる第十二條である。第二は第七條で、是れは門閥政治の排除、人才選用の意を明にするものである。此の一條は、人のために官を求める門閥政治を斥け、人を得、賢に遇ふことを願ふ、人才政治たらしめんとするもので「法王帝説」は憲法制定以前の同年五月に、既に此の人才選抜の目的の下に「即准五行一定爵位也」とあつて、所謂十二階の冠位といふものが定められて居るのである。斯く封建、門閥を打破することにより、中央集權の實を擧ぐるには、天皇の神聖を保持することが最も重大で、之を定めたものが第三條である。是れは臣民の天皇に對する絶對服從を説くもので、天皇の大權を確立する唯一の原則である。以上は憲法中の三大條目であるが、之に伴ふ他の規定も、之が實行の根柢となるものは國民の道念である。道念の涵養即ち國民教化の根本となるものは佛教である。太子は此の意味に於て、佛教を採用せられて居るので、第二條の三寶篤敬の一章は此の意味を示すものである。この一條は十七條中、佛教に關するものとして唯一のもので他には佛教については殆んぎ一言も言つてゐることはない。第一條は此の憲法の總則として、憲法成立の本意を述べしものとも認むべく、和の一字を説いたのは、政權爭奪に基く閥族の排擠を指摘したものであり、政治の根本は黨爭を止めて協力するにあることを明かにし、黨爭を絶滅せざるがため君父に逆ふものありと言ふ一段の如きは、明かに馬子に肉薄してるが如き感を與ふるものである。太子は、支那文化輸入に際し、單に佛教を御採りになつたばかりではなく、勿論儒教もお用ひになつて居るので、現に憲法には廣く國民教化の根本として、佛教を信ぜよの一條の外、殆んぎ全部は儒教主義によられて居る。是れは儒教は徳治を主眼とする政治の學であつて、所謂治國平天下の道であるから、政治は専ら儒教によることを示して居るものである」云。

誠に今はや亡き博士の筆端明快、論端透徹の極致を現出して居り、秃筆を擲つて、三歎せざるを得ない。

十

崇峻天皇弑虐問題を見る場合、先づ注意すべきは、恐らくはこの問題の最も大きな原因であつたであらうと思はれる。蘇我物部兩氏の軋轢によつて展開されて居る、政治問題であらねばならぬ。

史實の傳ふるところによれば、佛教傳來に引き續いて、蘇我氏と物部中臣二氏の間に争が起つて居る事が判る。

排佛派である中臣、物部二氏の中で、中臣氏は古來神祇祭祀の家系であるから、外國の神が國神と共に宮中に奉祭さるゝことを、厭ふといふのは、當然であり、その心意は容易に理解さるゝのであるが、大連物部氏の立場は斯く單純なものではなかつた。

崇神天皇の祭政分離以後、物部、大伴、久米の三氏が大連として直接政治に參與する様になり、其の後、成務天皇の時に至り、武内宿禰が大連として大連と相並ぶ地位に立ち、朝政に參與する事になつた。武内宿禰の子孫は平群氏蘇我氏等に分れて居るが、武内宿禰が神功皇后に隨つて、新羅征伐の軍に従ひ、朝鮮に直接關係を有するに至つて以來、彼の系統は總べての朝鮮問題に關係して居る事が見られ、従つて外國文明に對して相當理解を有して居つた事が想像される。これと同時に、物部氏は比較的保守的傾向の思想を有つて居たものと想像され、この保守主義的な事が、彼と中臣家と結ぶ契機をなすと思はれる。衰頹せる家系を除いて、蘇我氏が大連物部氏に政治上に於て對立するに至るのは、宣化天皇二年二月稻目が大臣になつた事より始まる。

斯くて佛教傳來を機として起れる、蘇我氏と物部中臣二氏の間に惹起された争は、大臣、大連の政權争奪に醸成され、それに中臣氏の宗教的感情が、纏つて發現して來たものであるからして、終始一貫して、常に之に附隨して離れないものは政權争奪の暗影である。

書紀の最も關係深き卷々を見れば、百濟の聖明王が上表文を奉つた事を記した續きに、

「是の日、天皇聞めし已りて、歡喜び踊躍りて、使者に詔して云はく、朕れ昔より來未だ曾て是の如き微妙しき法を聞くことを得ず。然るに朕れ自ら決めじ。乃ち群臣に歷問ひて曰く、西蕃の獻れる佛の相貌端嚴し、全ら未だ曾て看ず禮ふ可きや以不や。蘇我大臣稻目宿禰奏して曰く、西蕃の諸國、一に皆之を禮ふ。豊秋日本豈に獨り背かむや。物部大連尾與中臣連鎌子、同じく奏して曰く、我が國家天の下に王ましますは、恒に天地社稷の百八十神を以て、春夏社冬に祭拜ひこ事を事爲す。方に今改めて蕃神を拜ひこ事、恐らくは國神の怒を致したまはむこ事を。天皇の曰く、宜しく情願はん人、稻目宿禰に付けて、試に禮ましめむ。大臣跪きて受けて忻悦び、小墾田の家に安置る。勲に出世業を脩めて因し、向原の家を淨め捨ひて寺爲す。後に國に疫氣行りて、民、天しまに残はるゝこ事を致す、久しくして愈々多く、活療むるこ能はず。物部大連尾與、中臣連鎌子、同じく奏して曰く、昔日、臣が計を須るたまはずして、斯の病死を致せり。今遠からずして復らば、必ず當さに慶あるべし。宜しく早く投げ棄てゝ、勲に後の福を求めたまへ。天皇の曰く、奏す依に有司乃ち佛像を以て難波の堀江に流し棄つ。復火を伽藍に縱く。燒き燼きて更た餘り無し。是に天に風雲無くして、忽ち大殿に災けり(卷十九)」これの年代は、書紀では不明であるが、法王帝説に於ては、佛教傳來年代に關して、書紀の誤を正すものと考へられて居る次の文「志癸嶋天皇御世。戊午年十月十二日。百濟國主明王。始奉_レ度_二佛像經教並僧等_一。敕授_二蘇我稻目宿禰大臣_一。令_二興隆_一也。」にすぐ引き續いて「庚寅年。燒滅佛殿佛像_一。流_二卻於難波堀江_一」と記し次に「少治田天皇」云々の憲法制定年代を記して居る。これを以て見て、この事件の起つて居るのは、皇紀で一二九〇年の事である。

斯くて、表面上、佛教は影を潜めてしまつた。しかし一旦形を失ひし佛教は爾び蘇我氏の手によつて復興せんとする

氣運に導かれた。

書紀第二十卷には(敏達天皇十三年)「秋九月百濟より來ける鹿深臣(名字ヲ)彌勒の石の像一軀を有てり。佐伯連(名セリ)佛像一軀を有てり。是の歲蘇我馬子宿禰其の佛像二軀を請ひて、乃ち鞍部村主司馬達等、池邊直水田を遣して、四方に使して修行者を訪覓しむ。是に唯播磨國に僧還俗者、名は高麗惠便を得つ。大臣乃ち以て師を爲し、司馬達等の女島を度せしむ。善信尼(年十歲)又善信尼の弟子二人を度せしむ。其の一は漢人夜菩が女豊女、名を禪藏尼ミ曰ふ。其の二は錦織靈の女石女名を惠善尼ミ曰ふ。馬子獨り佛の法に依りて、三尼を崇敬ふ。乃ち三尼を以て、水田直達等に付けて衣食を供らしむ。佛殿を宅の東方に經營り彌勒の石像を安置まつ。三尼を屈請せて、大會の設齋す。此の時に達等、佛舍利を齋食の上に得たり。即ち舍利を以て馬子宿禰試みに舍利を以て、織の質の中に置き織の槌を振ひて打つ。其の質槌と與に摧き壞されぬ、舍利は摧き毀つべからず。又舍利を水に投る。舍利、心の願ふ所の隨に、水に浮き沈む。是に由りて、馬子宿禰、池邊水田、司馬達等、深く佛法を受けて、修行すること懈らず。馬子宿禰亦石川の宅に於いて佛殿を修治る。佛法の初め、茲より作れり。

十四年春二月戊子朔壬寅、蘇我大臣馬子宿禰塔を大野丘の北に起て、大會の設齋す。即ち達等が前に獲る所の舍利を以て、塔の柱頭に藏む。辛亥、蘇我大臣患疾す。卜者に問ふ。卜者對へて言ふ、文の時に所祭佛神の心に崇れり。大臣即ち子弟を遣して、其の占狀を奏す。詔して曰く、宜しく卜者の言に依りて、父の時に所祭佛神の心に崇れり。大臣即ち子弟を遣して、其の占狀を奏す。詔して曰く、宜しく卜者の言に依りて、父の神を祭詞ひまつれ。大臣詔を奉りて石像を禮拜みて、壽命を延べむミ乞ふ。是の時に、國に疫疾行りて、民死ぬる者衆し。三月丁巳朔、物部弓削守屋大連ミ中臣勝海大夫ミ奏して曰く、何の故にか肯て臣が言を用るたまはぬ。考天皇より陛下に及び、疫病流く行はれて、國の民絶えつ可し。豈に專に蘇我臣が佛法を興し行ふに由るに非ずや。詔して曰く、灼然なり、宜しく佛法を斷めよ。丙戌

物部弓守屋大連自ら寺に詣りて、胡床に踞坐り、其の塔を斫倒し火を縱け燐く。并せて佛像を佛殿を燒く。既にして燒けし所の餘りの佛像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。是の日に、雲無くて風ふき雨ふる。大連、被雨衣して、馬子宿禰を、從ひて法を行へる侶もを訶責めて毀り辱かしむる心を生さしむ。乃ち佐伯連御室（更ノ名ハ於ノ間礙ナリ）を遣して、馬子宿禰の供る所の善信等の尼を喚さしむ。是に由りて馬子宿禰敢て命に違はず、惻み愴き啼泣つゝ、尼等を喚し出して御室に付く。「有司便ち尼等の三衣を奪ひて、海石榴市の亭に禁錮へ楚撻ちき。」天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子王を差して使爲す。此の時に屬りて、天皇大連を、卒に瘡患みたまふ。故れ遣すを果さず。橘豐日皇子に詔して曰く、考天皇の勅に違背くべからず、任那の政を勤め脩むべし。又瘡を發して死ぬる者、國に充盈り。其の瘡を患む者言ふ、身燒かれ打たれ摧かるゝが如し。啼泣つゝ死ぬ。老も少きも、竊かに相語りて曰く、是れ佛像を燒きまつれる罪か。夏六月、馬子宿禰奏して曰く、臣の疾病、今に至りて未だ愈えず、三寶の力を蒙りずば救ひ治むべきこと難し。是に於いて、馬子宿禰に詔して曰く、汝、獨り佛法を行ふ可し。宜しく餘人を斷むべし。乃ち三尼を以て馬子宿禰に還し付く。馬子宿禰受けて歡悦びぬ。未曾有よと嘆きて、三尼を頂禮む。新に精舎を營りて、迎へ入れて供養ふ秋八月乙酉朔己亥、天皇、病彌留りて大殿に崩りましぬ。是の時に、殯宮を廣瀬に起つ。馬子宿禰大臣刀を佩きて誅たてまつる。物部弓削守屋大連听然而咲て曰く、獵箭中へる雀鳥の如し。次に弓削守屋大連手脚搖震きて誅たてまつる。馬子宿禰大臣咲ひて曰く、鈴を懸く可し。是に由りて二臣微に怨恨を生ず。三輪君逆、隼人をして、殯の庭に相距はしむ。穴穗部皇子天下を取らむと欲す、發憤りて稱して曰く、何の故か死王の庭に事へまつりて生王の所に事へまつらざる。」と。

以上の如く二軀の佛像を、僧還俗者を得た大臣馬子は、佛殿を作つて彌勒像を安置し、又塔を建立して大會の設齋をし、加ふるに三尼の出家によつて佛教再興の氣運が、いよく明になつて來たので、守屋を勝海が天皇に奏して、こゝに再び迫害の手を延ばして來て、佛教は再度の法難に遭遇した。こゝろが六月になつて馬子が疾病を三寶に祈らんを請

ひ、聽許を得て三尼を馬子に還された。八月になつて天皇崩御になるに大連大臣二臣の感情に暗雲が立罩めて、馬子に守屋は政治上に於ける如く感情的にも對立するに至つた。

敏達天皇（淳中倉太珠敷天皇）に次いで即天皇位れたのは、橘豊日天皇（用明天皇）であらせられる。天國排開廣庭天皇の第四子であり、御母は蘇我大臣稻目宿禰の女、堅鹽媛に申す。書紀には「天皇佛法を信けたまひ、神道を尊びたまふ」に述べて居る。ところが不幸にも、九月甲寅朔戊午、御即位になり、池邊雙槻宮を磐余につくられてから、御在位僅かに一年七ヶ月にて、御即位の翌々年四月御崩御になつたのである。

書紀第二十一卷によれば、二年（用明天皇）夏四月乙巳朔丙午、磐余河上に新嘗御す。是の日、天皇、得病たまひて宮に還入ります。群臣侍り。天皇群臣に詔して曰く、朕れ三寶に歸らむと思ふ。卿等議れ。群臣朝に入りて議る。物部守屋大連に中臣勝海連に、詔に違ひ議りて曰す、何ぞ國神に背きて他神を敬はむや、由來斯の若き事を識らず。蘇我馬子宿禰大臣曰す、詔の隨に助け奉るべし、誰か異なる計を生さむ。是に於いて皇弟皇子（皇弟皇子トイフハ次穗部皇子即チ天皇ノ庶弟ナリ）豐國法師（名ヲ闕）を引きて内裏に入る。物部守屋大連邪睨みて大に怒る。是の時、押坂部史毛屎急て來て、密かに大連に語りて曰く、今群臣卿を圖る、復た將に路を斷ちてむ。大連聞きて、即ち阿都（阿都ハ大連ノ別業ノ所在地ノ名ナリ）に退きて、人を集聚む。中臣勝海連も家に衆を集へて、大連を隨助く、遂に太子彥人皇子の像に、竹田皇子の像を作りて厭ふ。俄ありて、事の

濟し難きことを知りて、彥人皇子に水派宮に歸附く。舍人迹見赤禰、勝海連の彥人皇子の所より退るを伺ひて、刀を抜きて殺しつ。大連、阿都の家より、物部八坂、太市造小坂、漆部造兄を使ひて、馬子大臣に謂らしめて曰く、吾れ聞く、群臣我を謀るに、我れ故に退りぬ。馬子大臣、乃ち土師八島連を大伴毗羅夫連の所に使はして、具に大連の語を述べ。是に由りて毗羅夫連、手に弓箭皮楯を執りて、槻曲の家に就きて、晝夜離れず大臣を守護る（槻曲ノ家ハ大伴家ナリ）天皇の瘡轉盛なり。將に終せたまひなむとす。時に鞍部多須奈（司馬達等ガ子ナリ）進みて奏して曰く、臣、天皇の奉爲に出家して道を脩は

む。又丈六の佛像及び寺を造り奉らむ。天皇爲めに悲び慟ひたまふ。今、南淵の坂田寺の木の丈六の佛像、挾侍菩薩是れなり。癸丑、天皇大殿に崩りましぬ。秋七月甲戌朔甲午、磐余の池上の陵に葬りまつる。」と、その傳來以來二度までも破佛を受けた佛教は、奇しくも最初よりその奉信者であつた蘇我家の、血族の天皇の御發言によつて開かれた朝議に於て、反對派の守屋の主張があつたにもかゝらず、馬子は「可隨詔奉助」といふ理由の下に、これを押切つたといふ事實によつて、終に宮中に奉安さるゝ事になり、傳來以來の懸案も終に解決したのである。

書紀の註に「皇弟皇子は穴穗部皇子即ち天皇の庶弟なり」と記して居るが、穴穗部皇子の行蹟を見るに「引_ミ尊國法師入_ニ内裏」_ミといふが如き行動を取られる様には思はれないから、皇弟皇子を穴穗部皇子なりとす説は誠に疑はしい。欽明天皇の皇后は、正妃武小廣國押盾天皇の女石姫と申し、二男一女を御生みになつて居られる。即ち長を箭田珠勝大兄皇子と曰ふ。仲を譯語田淳中倉太珠數尊_(敏達天皇)と曰ふ。少を笠縫皇女と曰ふ」である。更に其外に五妃を納れて居られる、蘇我大臣稻宿禰の女堅鹽媛とその同母の弟小姉君の二人は、共にその中に數へられて居る。堅鹽媛は橘豐日尊_(用明天皇)、豐御食炊屋姫尊_(推古天皇)等を始め七男六女を生むで居られ、小姉君には四男一女があつて、第四の皇子が壘部穴穗部皇子であり、第五の皇子が泊瀬部皇子_(崇峻天皇)である。今問題として居る穴穗部の皇子は、この壘部穴穗部皇子であるから、恐らく佛教を信奉して居られたであらうと、思はれるのではあるが、敏達天皇崩御の時から既に野心を懷いて居られ、更に用明天皇元年夏五月の事件に際して守屋と結託して居られ、又後に於て、用明天皇が夏四月に崩御になり、秋七月の物部氏滅亡の記事の前に「大連、元は餘皇子等を去て、穴穗部皇子を立て、天皇と爲むと欲す。今に至るに及びて、遊獵するに因せて、替へ立つることを謀らむと望ひて、密かに人を穴穗部皇子に使はして曰く、願くは皇子と將に淡路に馳獵せむ。」といふ文が見られ、續いて「謀泄れぬ」と述べられある、これは用明天皇の二年の夏五月の事である。これ等の事々より見て、守屋と反對の行動を取られるが如きは全く考へられない事である。

この皇弟皇子といふのは用明天皇崩御の年の秋八月皇位におつきになつた崇峻天皇、即ち磐部穴穗部皇子の同母の弟泊瀬部皇子の事であつたのではないであらうか。

次に中臣勝海が像を作つて呪咀し奉つた、太子彥人皇子と竹田皇子は、共に敏達天皇の皇子である。即ち息長眞手王の女廣姫から御生れになられた一男二女の中に押坂彥人大兄皇子があらせられ、又、豊御食炊屋姫尊から御生れになつた二男五女の中に「東宮聖徳に嫁ひぬ」といふ菟道貝蛸皇女と竹田皇子と「彥人大兄皇子に嫁ひぬ」と記さるゝ小墾田皇女と息長足日廣額天皇に嫁はれた田眼皇女等が居られる。共に佛教を御信奉になつたものと思はれるが、勝海の呪咀し奉るゝいふ事が守屋の如く「欲下_レ去_二餘皇子等_一而立_二穴穗部皇子_一爲_二夫皇_一」といふ意圖の下に、太子彥人皇子と竹田皇子を除かんが爲の呪咀であるとするならば、敏達天皇の崩御に際して既に「欲取_二天下_一」して居られる穴穗部皇子と馬子及び勝海等排佛派との間に、用明天皇崩御の後に見らるゝ如き結托が、既に早くから存在する事を示すものと云ひ得らるゝであらう。

然りませば欽明天皇の皇妃の中に、共に蘇我氏の出である堅鹽媛と小姉君の二系統の中で、小姉君の所生である穴穗部皇子が守屋と結んで、堅鹽媛系の皇子達と皇位繼承を望んで争はれたものと云ひ得らるであらう。

物部大連が替立を謀つた謀の泄れたのが二年五月であるが、それに直ぐ引き續いて「六月甲辰朔庚戌、蘇我馬子宿禰等、炊屋姫尊を奉じて、佐伯連丹經手、土師連磐村、的臣眞嚙に詔して曰く、汝等兵を嚴ひて、速かに穴穗部皇子と宅部皇子とを誅殺せ。是の日の夜半に、佐伯連丹經手等、穴穗部皇子の宮を圍む。是に衛士先づ樓上に登りて穴穗部皇子の肩を撃つ。皇子樓下に落ち、偏なる室に走入りたまふ。衛士等舉燭して誅しまつる。辛亥、宅部皇子を誅しまつる。

(宅部皇子は檜隈天皇の子、上女王の父なり。未だ詳ならず。)穴穗部皇子と善し、故に誅しき」と、又「秋七月、蘇我馬子宿禰大臣、諸皇子と群臣とに勸めて、物部守屋大連を滅さむ」と謀る。泊瀬部皇子、竹田皇子、厩戸皇子、難波

皇子、春日皇子、蘇我馬子宿禰大臣、紀男麻呂宿禰、巨勢臣比拖夫、膳臣賀施夫、葛城臣烏那羅、俱に軍旅を率ゐて、進みて大連を討つ。大伴連嚙、阿陪臣人、平群臣神手、坂本臣糠手、春日臣、(名字ナ 闕セリ)俱に軍兵を率ゐて、志紀郡より澁川の家に到る。大連親ら子弟と奴軍とを率ゐて、稻城を築きて戦ふ。是に於いて大連、衣指の朴枝の間に昇りて臨み射るこゝの雨の如し。其の軍強盛にして、家に填ち野に溢れたり。皇子等の軍と群臣の衆と、怯弱恐怖れて、三廻却還く是の時、厩戸皇子、束髪於額にして(古俗、年少兒年十五六の間は束髪於額す、十七八の間は分ちて角子と爲す、今も亦爲り)軍の後に隨ひたまふ自から村度りて曰く、將た敗るゝ無からむや、願に非ずば成り難からん。乃ち白膠木を斫り取りて、疾く四天王の像を作りて、頂髪に置きて、誓言を發てたまはく、今若し我をして敵に勝たしめば、必ず當に護世四天王の奉爲に、寺塔を起立てむ。蘇我馬子大臣又誓言を發つ、凡そ諸天王、大神王等我を助け衛りて、利益を獲しめば、願はくは當さに諸天王と大神王との奉爲に、寺塔を起し立て三寶を流通へむ。誓ひ已りて、種々の兵を嚴して進みて討伐つ、爰に迹見首赤禰有り、大連を枝の下に射墮して、大連并に其の子等を誅す。是に由りて大連の軍忽ちに自ら敗れ、軍合りて悉に皂衣を被て、廣瀬の勾原に馳獵するまねして散れぬ。是の役に、大連の兒息と眷屬と、或は蘆原に逃げ匿れて、姓を改め名を換ふる者有り、或は逃げ亡せて向にけむ所を知らざる者有り。時の人相語りて曰く、蘇我大臣の妻は、是れ物部守屋大連の妹なり。大臣妄りに妻の計を用ゐて大連を殺す。亂平ぎて後、攝津國に四天王寺を造り、大連の奴半宅とを分けて、大寺の奴、田莊と爲し、田一萬頃を以て迹見首赤禰に賜ふ。蘇我大臣亦た本願の依に飛鳥の地に法興寺を起つ。と、許す可からざる事を謀つた大連守屋の上には、當然の事ではあるが、制裁の刃が下された。奮闘の甲斐もなく守屋は、奇しくも中臣勝海を刺した迹見首赤禰の矢に倒れ誅されて、神別の出であつた流石の物部大連家も、大いに衰へたが、天武天皇十一年其族榎井石上二氏が物部首連姓を賜はつて居る。

物部大連家が滅んで、守屋の資人捕鳥部萬逆心を懷いて奮闘して後、持たる劔を以て、其の弓を三に截り還た其の劔

を屈けて、河水の裏に投れ、別に刀子を以て、頸を刺して死んで符旨に依りて斬り梟された。

既に亂が全く平いた八月「八月癸卯朔甲辰、炊屋姫尊、群臣ミ天皇を勧め進りて即天皇之位。蘇我馬子宿禰を以て大臣ミ爲したまふこご故の如し、卿大夫の位、亦故の如し。是の月、倉梯に宮つくりたまふ。」ミ書紀第二十一卷に見ゆるが如く、皇位におつきになつたのは太子彥人皇子ではなくて、泊瀬部皇子であつた。これは全く想像の出来ない不思議な事實である。

既に述べた如く、穴穗部皇子ミ泊瀬部皇子ミは同母の御兄弟であるのであるが、馬子が諸皇子ミ群臣ミに勧めて守屋討伐を謀つた時、應じて俱に軍族を率ゐて進み、そして大連を討たれた皇子の第一に、泊瀬部皇子の御名が見えて居る事より見て、泊瀬部皇子ミ守屋ミの間には、何等結托して居られる様な關係が無いといふ事が判るのである。

用明天皇の太子ミ定まつて居つたのは、敏達天皇の第一の皇子押坂彥人大兄皇子であり、後に敏達天皇の皇后ミなられた豊後食炊屋姫尊から生れました小墾田皇女が嫁はれて居つたのである。然るに全く不思議な事には炊屋姫尊が群臣ミ天皇を勧め進られたのは泊瀬部皇子であつて太子彥人皇子ではなかつた。

守屋討伐の際に於ける厩戸皇子の如く、當代の政局危機に際して、情況を有利に展回せしむるに與つて力あつた方が泊瀬部皇子であつたミするならば、豊國法師を内裏に引き入れたのは實に泊瀬部皇子其人であつた。

泊瀬部皇子は御即位になつて、泊瀬部天皇（崇峻天皇）ミ申し上げた。

「元年春三月、大伴糠手連の女小手子を立て、妃ミ爲したまふ。是れ蜂子皇子ミ錦代皇女ミを生む」ミ紀に見えて居る。

用明天皇丙午夏五月の事件に於て「譯語田天皇（敏達天皇）の所寵愛、悉く内外の事を委ねたまひき。」ミ、言はれて居つた三輪君逆に、穴穗部皇子が物部守屋を遣して、伐たしめられたが、その時に際し「或本に云ふ、穴穗部皇子ミ泊

瀬部皇子ミ。社計りて守屋大連を遣す。」といふ文が見えて居り、これは泊瀬部皇子ミ同母の御兄君穴穗部皇子ミの關係を示す唯一のものであり、當時に於ては、この關係は或は馬子等に知られなかつたかも知れないが、その御兄君穴穗部皇子誅殺の直接の企畫者馬子を、今、大臣ミ爲して政を取られる御心情には、蓋し如何なるものがあつただらうか。

日に増し來る天皇ミ馬子ミの間の感情の隔りは、終に如何ミもし難き狀態ミなり、最後に日本歷史上最も悲しい事件で終局を告げて居る。即ち「五年冬十月癸酉朔丙子山猪を獻るものあり。天皇猪を指して詔して曰く、何れの時にか、此の猪の頸を斷るが如く、朕が嫌しミおもふ所の人を斷らむ。多に兵仗を設けたまひ、常のミきに異なるミミ有り。壬午、蘇我馬子宿禰天皇の詔りたまひし所を聞きて、己れを嫌ひたまはんミミを恐れ、儻者を招き聚めて、天皇を弑しまつらむミミを謀る。十一月癸卯朔乙巳、馬子宿禰群臣を詐りて曰く、今日東國の調を進る。乃ち東漢直駒をして天皇を殺したてまつらしむ（或本に云く、東漢直駒は東漢直磐井の子なり）、是の日、天皇を倉梯岡陵に葬めまつる。（或本に云く、大伴嬪小手子、寵の衰へたるを恨み、人を蘇我馬子宿禰のミミに使ひて曰く、頃者山猪を獻るものあり、天皇猪を指して詔して曰く、猪の頸を斷るが如く、何れの時か朕が思ふ人を斷らむミ。且つ内裏に大に兵仗を作る。是に於て馬子宿禰聽きて驚く。）丁未、驛使を筑紫の將軍の所に遣して曰く、内亂に依りて、外事を莫怠。是の月、東漢直駒、蘇我嬪河上娘を偷み隠して妻ミ爲す、（河上娘は蘇我馬子宿禰の女なり）馬子宿禰、忽に河上娘が駒の爲めに偷まれたるを知らずして、死去にきミ謂へり。駒嬪を奸せる事顯はれて、大臣の爲めに殺されぬ」ミ。

誠に御慘しき極である。天皇ミ大臣ミの間の隔意が、斯の如く極度に達し、且又弑逆の後の事から見て、御即位以後に於て天皇を勧め進つた群臣達の感情を惡化せしめた事件があるミするならば、それは泊瀬部天皇ミ穴穗部皇子ミの政治的關係に於て、より一屬深く且御親しき關係にあらせられし事を暴露し奉る事でなければならぬ。而して馬子ミ志を同じくする朝臣達の上に在つて、獨り孤立せらるゝに至つた天皇の御胸は、怪しく亂れ初め、魔に魅された如く荒んだ。

そして大連大臣二臣の政權爭奪の最後の大波瀾に、尊き犠牲として、其の身を献けられた天皇の運命は悲しかった。終に悲惨事は勃發した。それは冬十一月三日の事であつた。其日の中に馬子は群臣と俱に「其廿三天皇を倉梯岡陵に葬めまつ」つて居るのを見て、如何に簡單に事が始末せられたかと視はる。崇峻天皇に次で御即位になつたのは豊御食炊屋姫天皇であらせらる。書記第二十二卷によれば「卅九歳、泊瀬部天皇の五月十一日に、天皇、大臣馬子宿禰の爲めに見殺たまひぬ。嗣位既に空し。群臣、淳中倉太珠敷天皇の皇后、額田部皇女に請して、踐祚しめむ。皇后辭讓たまふ。百寮表を上りて勸進まつるこゝ三たびに至る、乃ち從ひたまふ。因りて天皇の璽印を奉る。冬十二月壬申朔己卯、皇后豊浦宮に即天皇位」に見えて居る。次に「元年夏四月庚午朔己卯、厩戸豊聰耳皇子を立て、皇太子と爲したまふ。仍りて録攝政。萬機を以て悉に委ねたまふ。」に見えて居り、づつ後廿八年になる「其二三是の歳、皇太子、島大臣、共に議りて天皇記及び國記、臣連伴造國造百八十部、并せて公民の本記を録したまふ。廿九年春二月己丑朔癸巳、半夜に、厩戸豊聰耳皇子命、斑鳩宮に薨ましぬ。是の時、諸王、諸臣、及び天下の百姓、悉に長老は愛兒を失ふが如く、鹽酢之味口に在れども嘗めず、少幼者は慈める父母を亡ふが如くて、哭き泣つる聲、行路に滿てり。乃ち耕夫は鋤を止め、春女は杵せず、皆曰く、日月輝を失ひて、天地既に崩れぬべし。今より以後、誰か恃まむ哉。是の月、上宮太子を磯長陵に葬めまつる」に見えて太子の御人格の偉大性を遺憾なく傳へて居る。

又内に於て斯くありしのみならず、十七年九月小野妹子臣を大使と爲し、吉士雄成を小使と爲し、福利を通事と爲して、唐客裴世清に副へて隋に國書を遣りその辭に「東天皇敬みて西皇帝に白す、使人鴻臚寺掌客裴世清等至でて、久しき憶ひ方に解けぬ。季秋薄く冷し、尊候如何。想ふに清念ならむ。此にも即ち常の如し。今、大禮蘇因高大禮乎那利等を遣して往でしむ。謹んで申す」述べて居らるゝ事よりして、國家的意識の高揚を認むる事が出来るのである。

聖德太子が、逆臣馬子を切つて、天下に大義を示されなかつた事に對して下された非難は、國民道德上より見て、極めて貴い聲であり得るけれども、佛教を現世利益的に解釋して居つた當時の社會に於て、佛教を周る崇佛と排佛の二派の對立が解消し國家舉つて崇佛の一大團體になつた當代に於て、血族關係に於ても政治上に於ても、又兵力上に於ても斯くばかり勢力のあつた馬子をして敢て非望をあらはさしめなかつたといふ事に對して力ありしものは、當代の現世利益的に解釋されて居つた佛教であつたにしても、それにもまして一層力ありしものは、實に當代の國民一般より日月の如く慕はれ天地の如く恃まれて居られた皇太子上宮豐聰耳皇子の在ませし事でなければならぬ。

後年太子の御兄弟御子孫合して廿三王が、蘇我入鹿のために忌まれ給ふて、終に其の弑する所となつて居らるゝ事は物部氏滅亡以後獨り朝廷に覇を振ふ蘇我氏の非望遂行に對して、障壁たらんさせられた、上宮王家の傳統的御精神のあらはれ、と解する事が出来るのであります。

十三

河野省三氏は「太子の崇佛は、其の人格の偉大であつたが爲に、又國史上に於ける位置の重大であつたが爲に、幾多の餘弊を生じたにしても、新しい外來思想に對する態度の自主的であつたこと、國家的觀念の涵養に努められたこと、國民の道德的意識を向上せしめられたこと、此の三點は、當に國民道德史上に於ける重要な太子の位置を定めたものと謂はねばならぬ」と云つて居られる。

十四

最後まで述ぶる事なくして、殘された問題が一つある。それは書紀卷第廿一崇峻天皇五年の大逆事件の記述に見らるゝ「是の日、天皇を倉梯岡陵に葬めまつる」といふ記事並びに「丁未、驛使を筑紫の將軍の所に遣して曰く、内亂に依

りて、外事を莫意」^一といふ記事に認めらるゝところの、該事件に關する一般の思想動向である。これの論究に於て、問題は更に資料解釋の再檢討にまで朔り、一層の興味が加はるゝ共に、一層晦澁になる。この問題に關しては更に稿を改む可きである。